

町長室から

北海道にも本格的な夏の到来を告げる30度超えの天気となりました。

国のGOTOキャンペーンはブリーキとアクセルを同時に踏んでいるとの意見が多くありますが、甚大な影響を受けている観光関係者の皆さんにとっては大いに期待するところがあると思います。

感染経路がわからない感染者の増加は心配な点が拭い去れませんが、個人個人の行動の自由を縛ることが出来ない中では自分の身は自分で守ることに徹するしかありません。

フクチン開発までの息の長い対応が求められます。

英語を母国語として話す人をALT(外国語指導助手)として、小・中学校に赴任していただき、子どもたちに生の英語を指導していただいています。浦幌町には2名

来ていました。

その1人であるヘイリー・ルネー・グティックさんが離任するため挨拶に来てくださいました。

彼女は2年間の赴任でしたが「子どもたちとも楽しく過ごせたいし、浦幌町で楽しい時間を過ごすことが出来ました。好きなビールもたくさん飲みましたし、浦幌町がすっかり好きになりました。まだ出身のフロリダには帰らず、これから札幌での生活になります。が、知り合いも沢山出来ましたので、これからも浦幌町へ遊びに来たいです」と言ってくれました。

わたしからも「浦幌町の子どもたちにネイティブな英語を教えていただきありがとうございます。健康に気を付けて、また是非遊びに来てください」とお送りしました。

総合振興計画審議会の会長さん

に「浦幌町第4期まちづくり計画」の諮問をさせていただきました。

「第4期まちづくり計画」は第3期計画が今年度をもって終了することから2月から町職員で構成する「総合振興計画策定委員会」を発足させて、「総合振興計画審議会」の委員さん、産業団体とのまちづくり懇談会など行いながら、基本構想、基本計画の検討を進めてきましたが、案が出来たことから「総合振興計画審議会」へ諮問するとともに町民へのパブリックコメントを求めています。

「第4期まちづくり計画」に町民の皆さんのご意見をお待ちしています。

新型コロナウイルス感染症対策として国は第2次の「地方創生臨時交付金」を編成しました。

浦幌町はこれまでも影響を大きく受けている町民の皆さんに行き

渡る様に予算編成を行ってまいりましたが、第2次の地方創生臨時交付金を9月議会へ予算案を提案することになりますので、その編成作業を進めています。

全ての人が受ける損失を補填できるものではありませんが、事業を継続していくための栄養剤となるようにしたいと考えています。

暑い夏を乗り切るために、コロナ対策と同時に熱中症への対策も必要です。

十分な休養を取りながら、無理をせず自然体で、なおかつ3密を避けて咳エチケット・手洗い・マスクの着用で過ごす新北海道スタイルの夏を体験してみようではありませんか。

浦幌町長 水澤一廣

COLUMN

連載 113
仕事について考える

札幌大谷大学社会学部
教授 平岡祥孝

北海道の短い夏は、コロナ禍で思う存分楽しむことが出来ませんでした。私事で恐縮ですが、今年はその十勝の抜けるような夏の青空を直接見ることが出来ませんでした。澄み切った秋空を見るためにも、1日も早いコロナ収束を願うばかりです。

ようやくテレビドラマで「半沢直樹」新シリーズが再登場したことは、うれしい限りです。第1回目の「どこで働くかじゃない。どう働くかだ」という半沢の台詞に、まずは感動しました。半沢が親会社から子会社への単なる出向者ではなく、子会社の真の一員となった瞬間ではないでしょうか。キャリア教育を担当する一介の私学教員の視点に立てば、その台詞は正鵠を射る一言に思えた次第です。蛇足ながら、第1回目の視聴率は関東地区22.0%、関西地区23.3%だったそうです（ビデオリサーチ調べ）。

ではまるのではないのでしょうか。今年の採用試験も、この一番は対面型面接です。この大学かではなく、その大学で何を学び、何が身に付いて、どう成長したのかを、自分の言葉で自信を持って語る学生が内定を得ていると、私のささやかな経験からは見て取れます。

また、ドラマは危機を乗り越えて痛快な逆転劇を演出するためには、半沢1人では不可能なことを教えてくれます。協力者や支援者がいてこそ、障害や困難を克服して目的が達成されます。所詮1人で出来る仕事など、高が知れています。やはり仕事はチームワークが基本であり、人との関係性あるいは人のネットワークを重要視しなければなりません。

そのためには、組織の内外を問わず、信頼関係を日常的に築いていく努力が求められます。思惑や打算あるいは利害に基づいた関係構築は、両刃の剣いや砂上の楼閣か。誠実さや律義さを土台として、人には丁寧に接していくことが何よりも大切だと思います。それは一朝一夕にはいきません。時間を使うこと、気も遣うこと、身銭を切ることも付いて回りまわす。背伸びすることなく、気長に自分の歩幅で進んでいくしか道はありません。

「負けてたまるか」「やられたらやり返す。倍返しだ」とは、何事にも全身全霊を傾ける半沢のモットー。

誰しもが半沢のような強い精神力を持ち合わせていません。ですが、モチベーションは周囲の環境や人間関係に左右されることなく、自ら引き出すものでしょう。上司は部下に寄り添って仕事の手助けをするスーパーリーダーとして、教員は学生に寄り添って支える教育の実践者として、彼ら彼女らの背中を押す役割があると思うのですが。

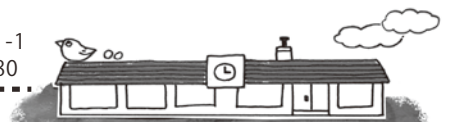
半沢の生き方を見て思い出したのは、AKB48の「365日の紙飛行機」の一節でした。「その距離を競うより、どう飛んだか、どこを飛んだのか、それが一番大切なんだ」という歌詞は、教員人生の黄昏を迎えて恥多き過去を振り返ることが多くなった私には、慈雨のように心に沁みてきます。もちろん評価は他者が行なうものでしょう。けれども、自分自身にとっては、達成感と納得感が何よりも重要だと思えます。あくまでも私見ながら、客観的評価など存在しないことを承知の上で、冷静にわが身を省みることは必要でしょう。



【ひらおか・よしゆき】札幌大谷大学社会学部教授。英国の酪農経営ならびに牛乳・乳製品の流通や消費を研究分野としている。高校生・大学生の就職支援やインターンシップ事業に携わってきた経験から、男女共同参画、ワーク・ライフ・バランス、仕事論、生涯教育などのテーマを中心に、講演やメディアでも活躍。

Tokomuro Lab 通信 vol.6

浦幌町字常室 51-1
Tel: 015-578-7580



『常室ラボに鶏小屋ができました』

こんにちは、常室ラボ長の三村直輝です。常室カフェをしたり、「新しいしごとの創造拠点」である常室ラボ（以下ラボ）を運営したりしています。ラボを身近に感じてもらいたいと思い、常室ラボ通信を始めました。さて、常室ラボ担当地域おこし協力隊の鹿戸さんが主導で、ラボで鶏を3羽飼うことになりました。鶏小屋作りは地域の方にお手伝いいただき、木材も他の方からわけていただき、鶏も飼っている方からわけて頂いたそう。ありがとうございました。僕自身はそういったお金を介さず、お手伝いをしたり、余っているものがあれば分けたりするなどの「思いやり」や「お互い様」の精神が自然と根付いているところが、地域が好きなのところの一つです。きっと鹿戸さんもお手伝いして下さった方に、何か恩返ししたいと思っていることでしょう。鶏が産んだ卵が、カフェで出せるようになるのが楽しみです♪ぜひお気軽に鶏に会いに、ラボに遊びに来てください◎それではまた。

【開校時間Opening Hours】

定休日 火曜・水曜

ラボ 10:00-17:00
キッズスペース(無料)やフリースペース、コワーキングスペースをご利用いただけます。校内の見学やイベント開催のご相談 etc...承ります!ぜひ遊びに来てください。(0A)

カフェ 土曜、日曜
11:30-15:00...ランチタイム
15:00-17:00...カフェタイム
校庭を眺めながら、うらほろ食材の美味しいお料理とスイーツでリフレッシュ。珈琲一杯からお気軽にどうぞ♪